2012（平成24）年度
大手前大学 公開講座

阪神文化へのいざない　～学んで体感・阪神間～

アートと聖地

阪神間に位置する大手前大学。その豊かな歴史や文化に囲まれていることに特に着目して、阪神間の文化や風土に関しての学びを基本コンセプトに、2010（平成 22）年度から３年間シリーズの公開講座「阪神文化へのいざない　～学んで体感・阪神間～」を開講し、これまで「味覚と文芸」、「歴史と文化の旅」をテーマに取組んでまいりました。シリーズ最終となる2012（平成 24）年度は「アートと聖地」をテーマに取り上げます。講座は４つの章立てからなり、いずれも講義形式と見学または体験学習のような参加型ワークショップの２回、全８回の構成となっています。また、講義形式のみ（全４回）の受講も受け付けております。お誘いあわせの上どうぞ奮ってご参加ください。

コンテンツが「聖地」をつくる

大手前大学　谷村要講師

近年「コンテンツツーリズム」ということばが観光学を中心に注目されています。これは、映画やTVドラマ、小説、まんが、ゲームといったコンテンツを活用して観光地をつくりだしていこうという動きを指すのですが、そのようにコンテンツによって価値づけられた場所が「聖地」と呼ばれるようになっています。なぜこういった動きが出ているのでしょうか？そして、それは地域に何をもたらしているのでしょうか？

～「聖地」化を活用した地域振興～

コンテンツツーリズムが見られる場所として、新長田の商店街を見学します。新長田では、神戸市出身の漫画家・横山光輝原作の作品に関連した施設や鉄人 28 号のモニュメントを用いたまちおこしを展開しております。また、商店街のロケーションを活用したコスプレ・イベントも度々開催されています。新たな試みを進める新長田の現状を観察してみましょう。

第１章
４月
５月

阪神間の劇場と演劇文化

大手前大学　平川大作准教授/
大手前大学非常勤　瀬口昌生講師

劇場は出会いの場所です。演者と観客が、物語と想像力が、東西の文化が、過去と現在が出会う特別な場所を通じて、阪神間の芸術と文化を学びましょう。小林一三のヴィジョンが花開いた宝塚大劇場、震災を乗り越えてスタートした兵庫県立芸術文化センター、独自の劇団を有するピッコロ・シアターなど、すぐそこにある劇場の扉を開くきっかけになれば幸いです。

～演劇の聖地：創造の現場～

稽古場は演劇における聖地です。観客の前で初日を迎えるまで、稽古場では俳優とスタッフは、上演台本という地図を手にした探検チームのように「創造の現場」という未踏の地へと旅立ちます。普段は観客の目には触れることがない「稽古場」ではどのような共同作業が、いかなる表現の刻苦がなされているのかを、模擬的にご覧いただきます。

第４章
11 月
12 月

医療現場におけるアートの役割

大手前短期大学　藤本幹也講師/
NPO 法人アーツプロジェクト理事　室野愛子氏

医療の現場では、現在施設利用者の心を癒す効果があるホスピタルアートが盛んに取り入れられています。また、一方で医療施設など複雑な建物において、利用者が自分の行きたい場所、あるいは今自分がどこにいるのかを正確に把握するためのサイン計画においても様々な工夫がされており、利用者も安心して目的地までたどりつくことに役立ちます。本講座では、医療の現場に取り込まれているアートについて着目し、その役割や、機能性を紹介したいと思います。

～ホスピタルアートの見学～

壁画を始め、絵画や彫刻、写真などたくさんの「ホスピタルアート」が展示され、屋外には日本初の取り組みであるホスピタルパークがあるなど、癒しの空間が多数導入されている施設を見学し、実際のホスピタルアートを体験いただきます。

第２章
６月
７月

第３章
９月・10 月

川西英《元町初夏》から見る戦後ファッション

神戸ファッション美術館学芸員　百々徹氏

神戸を代表する版画家・川西英。彼が終戦間もない 1949 年に神戸洋画会で発表した作品『元町初夏』には、洋服を着てめかし込んだ男女が闊歩する様子が華やかな色調で表されています。神戸元町にあったジュラルミン街を舞台に描かれたこの一枚の絵を入口として、戦後日本の洋装化の変遷についてお話しします。

～神戸ファッション美術館の見学～

ワークショップでは、神戸ファッション美術館の展示を中心に、ヨーロッパにおける服飾の変遷を解説するとともに、その西洋のスタイルが日本に入ってきた様子をお話しします。特に、戦前のモガ・スタイルや、戦後のニュールックなど、日本にも大きく影響を及ぼしたスタイルを詳しく解説していきます。

プログラムＡ…全８回　・　プログラムＢ…講義４回（4・6・9・11 月）